

世界の転換期における大学の役割と人材育成

-城西国際大学 世界学長会議で考える-

開倫塾

塾長 林明夫

Q：世界学長会議に参加したそうですね。

A：(林明夫：以下省略)はい。城西国際大学の創設 20 周年を記念して、4 月 29 日に東京紀尾井町キャンパスで開催された世界学長会議に参加しました。

創立 20 周年を迎えた城西国際大学は、世界の 80 もの大学と提携を結び、この会議には世界各地から 14 大学の学長が参加し、世界の転換期における大学の役割と人材育成について議論をしました。日本語と英語の同時通訳は、大学の先生方が担当なさっておられました。

参加の学長は、柳澤伯夫 城西国際大学学長、石田益実 城西国際大学副学長をはじめ、東西大学校(韓国)、天津外国語大学(中国)、セント・イシュトバン大学(ハンガリー)、カモーン・カレッジ(カナダ)、ケルン大学(ドイツ)、淡江大学(台湾)、カリフォルニア大学リバーサイド校(アメリカ)、韓国外国語大学(韓国)、ブダペスト商科大学(ハンガリー)、ブスティマ大学(ウガンダ)、北カレリア応用科学大学(フィンランド)、トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学(マレーシア)、東北大学(中国)などでした。

とても熱心な議論が行われました。

Q：議論はどのような内容でしたか。

A：ヨーロッパでは、ヨーロッパの高等教育の国際通用性を高めることを目的としてヨーロッパ各国によって 1999 年より取り組まれてきた高等教育改革である、ボローニア・プロセスが本格化しています。ヨーロッパの大学とヨーロッパ以外のいくつかの大学が、ボローニア・プロセスとそれに伴う基準の導入によりカリキュラムを調整して、教育プログラムの認定を簡略化し、国境を越えた大学間の連携を拡大しています。

ヨーロッパ以外の世界中の大学も、自らの存在を懸けて国際競争力を強化するために他国の優秀な大学との提携を模索しています。

自分の大学の学生や教員、研究者、スタッフを国際社会でも活躍できる人材として育成することで、大学の存立を図るにはどうしたらよいか、この世界学長会議でも熱心に話し合われました。

そのために、世界各地に優れた提携先を一つでも多く確保することが求められます。

同時に、世界各地の提携校から一人でも多くの優れた留学生や教員、スタッフを招くにはどうしたらよいかも話し合われました。

例えば、城西国際大学では、留学生を積極的に受け入れると同時に、全学生を提携先の大学に何らかの形で留学させたい、何年かに一度は全教員に提携先の大学で 1 単位以上の授業をさせた

い、それによってグローバルな学生と教員を育成したいとの意向をお持ちのようでした。

Q：大学間の交流や国際交流はずいぶん熱心なのですね。

A：もともと、アメリカの大学は単位の互換が積極的に行われています。ヨーロッパでも、先程のボローニア・プロセスでヨーロッパ中の大学が一体化しつつあります。日本でも、大学を卒業するまでに国内外のいくつかの大学で勉強することが普通になる日もそう遠いことではないと私は思えます。

Q：日本では少子化で定員割れをしている大学や短期大学、専門学校、大学院が多いようですが、これからの大学経営はどうすればよいとお考えですか。

A：大学等、学校法人の創立の理念をしっかりと確認した上で、社会の発展に貢献するという大学の使命を全うする以外にありません。

大学に求められるのはグローバル人材の育成でありますので、大学自体をグローバル化すれば、日本の大学は日本のどこにあってもいくらでも活性化します。生き残ることはできます。

Q：大学のグローバル化とは何ですか。

A：授業の半分以上は世界の共通語である英語で行うこと。教員やスタッフの半分以上は外国人とすること。学生の半分以上は外国からの留学生とすることです。

世界で一番安心・安全な国である日本で教えたい、働きたい、学びたい人々は、世界中に山ほどいます。

大学で学ぶ学生、教員、事務職員をどんどん外国の大学に派遣することも大事です。

そのために、城西国際大学を見習って世界各大陸に優秀な提携先を100以上確保することです。世界の多くの大学も日本に提携先を探し求めていますので、今は絶対のチャンスです。

この世界的な動きに乗りさえすれば、現在どのような状況であっても、日本の大学は必ず生き残れると私は確信します。この努力を怠る大学には未来はないのではないかと思います。

Q：学習塾、予備校、私立高校の経営幹部の方にお伝えしたいことはありますか。

A：ヨーロッパのボローニア・プロセスの本格化に伴い、世界中の大学が生存を懸けた大国際競争の時代に突入しました。この動きは、日本の大学教育だけではなく、大学入試制度や高校の教育にも数年以内に大きな影響を及ぼすものと容易に推測できます。

また、OECDでは、15歳時のPISAテストのみではなく、大学卒業時の国際学力標準テストも準備が終わりつつあります。PISA型の学力が大学卒業生にも求められます。

学習塾、予備校、私立学校でもPISA型の本格的な学力育成が求められますので、PISA型学力を評価する「言語力検定」などを積極的に活用する必要が高まったと考えます。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、お読みになれば必ずお役に立つ本を三冊ご紹介いたします。一冊目は、フリア・ゴンザレス著「欧州教育制度のチューニング、ボローニャ・プロセスへの大学の貢献」(明石書店、2012年2月20日刊)です。ボローニア・プロセスについての最新の基本図書です。

二冊目は、OECD 著「日本の大学改革－ OECD 高等教育政策レビュー：日本」（明石書店、2009年10月26日）です。日本の大学についての客観的な評価が有益です。この2冊で世界の大学の動向と日本の大学の実状と課題を熟知した上で、日々の教育にあたって頂ければ幸いです。

三冊目は、辻本雅史著「『学び』の復権－模倣と習熟－」（岩波現代文庫、岩波書店、2012年3月16日刊）です。江戸期の寺子屋と藩校の儒教教育に学習文化の原点を探る、私塾・私学関係者必読の書です。

－ 2012年5月7日、林明夫記－